

# 令和5年度第1回 新庄市総合教育会議会議録

開催月日	令和5年8月21日(月)
開催場所	新庄市役所301・302会議室
出席者	市長、高野博教育長、栗田正人委員、阿部浩悦委員、斉藤浩昭委員、奥山京子委員
欠席者	なし
事務局	渡辺政紀教育次長兼教育総務課長、杉沼一史学校教育課長、伊藤幸枝社会教育課長、三原学校教育課主幹、齋藤教育総務主査、鈴木教育総務主査、八鍬ふるさと歴史センター所長、千川原主事

## 議事の大要

午後3時00分より、市長のあいさつで、総合教育会議を開会する。

### 1. 開会

### 2. 市長あいさつ

### 3. 協議

小中義務教育学校における「ふるさと学習」の推進

(市長)「小中義務教育学校における『ふるさと学習』の推進」について、学校教育課より説明していただきます。

(学校教育課長)本日の協議案件であります本市における、小中義務教育学校における「ふるさと学習」の推進について、資料に基づきながら説明させていただきます。

資料に沿って説明

(市長)地域に根ざした学校づくりの推進という教育大綱の施策を行うための取り組みとしてのふるさと学習であります。その底辺には、活動そのものを認めて欲しいというような思いがあるのではないかと思います。昨年の11月、教育の日の発表会を私も聞かせてもらいましたが、発表に対し、行政が具体的な形でそれを採用する、或いは、文書などにより意見・回答をするなど、学習に対しての評価をすることで児童生徒のやる気が出るのではないかという話がありました。これにはなるほどと思ったところです。さて、今の説明を聞いて、ふるさと学習に対する取り組み、要望、また、今後あるべき形などのご意見を栗田委員の方から順番にお願いします。

(栗田委員)説明の中で、ふるさと学習の目指す姿というところで、新庄を本気で探究した経験が、新庄市に将来の自分の居場所を見つけることであり、自分のふるさとに必要とされているという自己有用感を醸成するものである、とありましたが、本当にそのとおりだなと思います。そこで思い出

したのは、教育委員会協議会の東北大会で、大館市に行かせていただいた際、大館市の教育長の、ふるさとキャリア教育についての講演を聞きました。ふるさと学習とキャリア教育を結びつけた内容を、大館市全体でやっているそうです。大館市教育長の話の中で、大館に誇りを持つ児童生徒の育成を図るだけでは駄目だという表現がありました。つまり、ふるさとキャリア教育のねらいは、将来的に大館を支える人材の育成です。そのために、教育委員会が行っていることを具体的にお話ししていました。その中で、放課後や休日に子どもたちが様々な職場体験のようなことができるように、教育委員会でその窓口となっていると紹介していました。教育委員会が様々な体験をできる場を見つけ、各学校にチラシを配布して、子どもたちが自由に参加できる体制を作っているそうです。新庄市の各小中学校、義務教育学校のふるさと学習の内容を見せてもらったところ、学校ごとに特色のあるものが多いようですが、ふるさと学習に対する市全体のねらいが、子どもたちが新庄を学んで、経験をして、新庄が好きだと思ってもらうことに留まっているのではないかと思います。最終的な目標に、どの学校も9年間で新庄を支える人材の育成という目標・意思を持つと、9年間の流れが違ってくのではないかなと考えました。そこでヒントを得たのは、二十歳を祝う会の市長の挨拶でした。新庄市の工業団地に来ている会社の代表の方のお話を紹介してもらったのですが、おそらく、会に参加していた20歳の人たちはほとんど知らない内容だったと思います。もっと早くあのような情報があれば、新庄に残りたいと思った人もいたのかなと、市長の話を聞いて思いました。そういうふうな関わりを、もっと小中学校時代から持たせることも可能なのではないかと市長の挨拶を聞いて考えたところでした。教育委員会としては、総合的学習の目標を具体的に絞り込む必要があるのかなと感じます。私が考えたのは、地域を支える人材という部分で、それを育てることが、総合学習の一番の到達点だということです。

(市長) ありがとうございます。斉藤委員、お願いします。

(斉藤委員) 説明をお聞きして、ふるさと学習の必要性という観点から、この学習をとおしての最終的なものは何なのかという考えについて話します。今、新庄市で育てている子どもたちが、人材育成という部分で優秀な人材になったときに、仕事にどれだけ残ってもらえるかといったところを、以前私もPTA連絡協議会の中で市長とお話した経緯があるのですが、やはり多くの人が都市圏へ出て行って、帰ってこなくなってしまうといったことを考えたときに、今のふるさと学習で、子どもたちが経験・体験している様々な活動が、いずれ新庄市に帰ってきたいという気持ちに火をつけるという結果に結びついていくのではないかと感じていたところでした。この中で、子どもたちが発表することによってアウトプットしたものを、行政や企業がどのように受けとめて、形にしていくかということが課題だと私は受けとめました。高校生の取り組みで、新庄東高校の生徒が提案したものが、プリンとして形になって、それが商品化されて販売されています。それを作った高校生は、自分が作ったものが商品化されて、現在も販売されているのだなという思いを持ち、いずれ作ってくれた会社に、自分も大人になったらそこに入って一緒に働きたいと少しでも考えてくれたら、その気持ちが大きくなることでその企業への就職に繋がってくるのかなと思います。子どもたちが提案した事例ということで、新庄市の開府400年について、私はこうしたいという意見があれば、それを形にしてあげることによって、地元就職に結びついていくプロセスになるのではないかと思います。

(市長) ありがとうございます。次に、教育長お願いします。

(教育長) 1つ目に、「地域の行事に参加している」、「新庄や自分の住んでいる地域が好きだ」と答えた児童生徒の割合が下がったということについて、以前より割合が下がっていても全国平均以上であったことはとてもよいことではあります。一度中止や延期したものを再度同じように開催するというのはとても難しいため、コロナによる制限で中止が続いていた地域の行事については、数自体が減ってしまったのかもしれませんが、同じ事業を再開させることが難しいのは、前回の良かった点や改善点、予算などといった前任者からの引き継ぎがなく、分からないことが多い中で進めていく必要があるという点が大きいように思います。様々な社会教育事業について、親子で参加できるイベントを開催しても、親が地域のことを知らないため、参加者がなかなかいなかったということがありました。これについても、その当時伝えられていた体験が別のものによって変わってきていることの影響があるのではないかと思います。そのため、一度止まっていた事業はそのまま復活するのではなく、その事業をどのようにすれば参加者がたくさん得られるのかなど、1回見直す必要があると思いました。2つ目に、先ほど栗田委員からもありましたが、大館市の教育長の講演で、大人が本気で子どものやる気を出させているという話があったのですが、やはり大人の本気度をもっと子どもたちに見せてあげなければいけないのではないかと思います。栗田委員が、大館市では教育委員会が子どもたちに職場体験の窓口をしている、と紹介しておりました。これを子どもハローワーク事業と呼んでいるようですが、この事業できりたんぽまつりというイベントのボランティアを募集したところ、600人も人が集まったそうです。新庄市でも、様々な事業がある中で、ハローワークのような自分で探せる形を取り、やってみたいということをどんどん見つけてもらい、大人も子どもたちと一緒にイベント等を持続させたいという気持ちで参加してほしいと思います。各町内に色々な歴史があることは分かっておりますが、できることから少しずつ進めていく必要があるかと思えます。未来人材育成教育をとおして子どもたちを育てているという大館市の教育長のお話がありました。新庄市でも活かせる場所があるのかなと私も感じてきたところです。3つ目に、地元企業の方から、もっと地元の小・中学校の児童生徒が見学に来てくれればいいなという声が出ているという話を聞きました。他の市町村からは来るものの、新庄市の学校の子どもたちは来ていないという話をある企業で言っていたそうです。企業によって、受入れられるところとそうでないところがあるので、すべての企業が見られるわけではありませんが、親子の工場見学会や農業体験会などを実施しているところもたくさんあるかと思うので、ぜひその点についても市内の学校に周知できればなと思います。

(市長) ありがとうございます。奥山委員、お願いします。

(奥山委員) 学校協働活動推進員の方について、最初は「何をしているのか分からない」、「学校にいらなくてもよいのではないか」というような意見があったそうですが、資料の中に推進員の方の学校滞在を可能な限りお願いしたいという声があって、この方たちの活動が認められてきているということが変化としてあると思いました。また、課題として、なかなか地域の方々の協力が得られないというお話がありましたので、学校運営協議会の方々がもう少しこの活動に力を入れてくだされば、よりよい方向に進んでいくのではないかと思います。もう一点、新庄市のことは好きだけど、将来的に住みたいと思っている人が少ないというのは、地元で抱えている問題にはあまり触れてい

ないからではないかという思いを持ちました。問題があるからもっと地元にいる私たちが頑張らなければ、という思いに繋がるような熱意や課題があった方がいいのではないかという思いを持ちました。先日、地域のお祭りに出てみて、皆が力を合わせていろいろな活動をやっているのを見て、表に出る方々だけではなく、裏で地域を支えているような若い方たちとの交流も大事であるという思いを持ちました。地域にいるモデルに近い方を見れば、自分たちはこんなこともやれるのだなという思いが持てるようになるのかなと考えました。加えてもう一点、アウトプットが大切だというお話がありましたが、いろいろな学校の発表を聞いて、同じ学年の子たちと一緒に発表させるなどして、子どもたちがそれを見学することができる、子どもたち同士で刺激を受けることができるのではないかと思います。また、高学年になった時には、企業や行政の方から意見を聞くことで、考えの甘さが学ぶことができたり、挫折したりなどといった経験があると、その課題を解決しようとしてもっと学習が深まるのかなと思いました。これまでのふるさと学習の課題として、考える・発表するだけで終わってしまって、達成感や成就感が足りないというお話があったので、そこを改善するための刺激として意見をもらう場があると、もう一段上がるのかなという思いを持ちました。

(市長) ありがとうございます。阿部委員、お願いします。

(阿部委員) このふるさと学習が始まったばかりの頃は、学校の先生方も進め方がよく分からなかったかと思っています。現在は体系的にまとまってきているようですが、新庄はまだ小学校・中学校区で、文化系が全く違うものであるかと思っています。イバラトミヨについての学習は北辰小学校でしかしておらず、それを他学区の子ができるかと考えると難しいと思いますし、そのような他学区ではできないようなものが新庄市ではたくさんあるかと思っています。そのため、テーマに横断性がないと感じました。中学生くらいの年齢で、ある程度いろんなものに興味があると、様々なテーマの中から学びたいことを見つけることができるかもしれませんが、基本的に小学校区・中学校区において、地域の自然や地域から生まれた人物を探究していくということは、より身近なことではあるものの、プログラムの組み方によっては無理があるのかなと思う次第です。また、学校の先生は転勤があるため、ある学校のふるさと学習の担当になったとしても、その地域に何年何十年と住んでいて、こういうことをもっと教えたい、と思っている人と子どもたちとがどういう交流ができるかを考えると、先生となってくれる地域の方々と学校の先生との信頼関係が築けなかったら難しい話であるかと思っています。そのため、学校運営協議会委員に選ばれたとしても、先生方と地域の人たちとの間でもっと深い信頼関係を築く必要があると感じます。これはPTA活動にも言えることでありますが、やはり結びつきがなければ一時の集まりで選ばれた方と先生方とで一緒に活動をやりましょうと言っても、なかなか難しいものです。先ほど教育長から、新庄の企業で、他市町村から視察にくる所があるのに対し、新庄市内の学校からは来たことがないという話がありました。それについては、商工観光課と商工会議所とで Shin-job 体験として、市内の中学校を回ることで、子どもたちも新庄の企業について少しは分かっていただけではないかと思っています。また、私は小・中学校及び高校のふるさと学習の中に、地元企業の話が入っていた方がよいのではないかと思います。しかし、現在はそれがまだまだ足りない部分があり、テーマ例の中にもそれが入っていないのが現状であります。さらに、新庄のふるさと学習は、お祭りを抜きには語れません。せっかく子どもたちが1人1台タブレットを持っているので、発表をしてもらえば、山車の構成図をタブレットで作ってもらったりすると、山車の場面にはルールがあるということが分かります。山車の

色々な情報をタブレットに組み込んで発表した後に、大人の皆さんから意見・アドバイスをもらうことで初めて知ることができることもたくさんあります。ふるさと学習も、現在の ICT 活用に合わせて進めていくことができるのではないかと思います。市長がこれから進められようとしている歴史的風致維持向上計画の中で、子どもたちが、地域の遺産となるものをどういうふうに自分の中に取り組みでいって、自分の子・孫の代まで残していこうとする意欲がどれだけ出てくるかということ、これから試されなければならないと思います。また、せっかく開府 400 年という節目の年なので、イベントをイベントだけで終わらせず、子どもたちに新庄の歴史などを教える機会として、実りのあるものにしていく必要があるのかなと思います。

(市長) ありがとうございます。先人の様々な意見を聞くと、地域の未来は、その地域の過去にあるとのことで、その地域の過去を検証することが将来の道しるべとなるのではないかということが様々な場面で出てきているようなので、そういう意味で検証する機会が必要だろうと思っております。また、文化を醸成して育てていくことは、企業メリットが非常に強いです。ハイテクハイタッチというビジネス用語があります。企業文化の中では、ハイクオリティになればなるほど、ハイタッチ、つまり人間による関与のような文化が必要になります。企業が求める生産性を高めること、或いは技術革新のためには、単なる労働力、つまりローテクロータッチが必要であります。企業が地域の中で社員を磨いて、ハイクオリティへの挑戦をするには、ハイタッチである文化が必要となります。そのため、文化の高い地域に行くと企業も成長することに繋がり、最終的に地域に経済が還元されることとなります。ハイテクハイタッチを目指すべきだろうというのが、私なりの考えです。成人式の時に初めて情報提供をしましたが、私も長年学ぶことで得た情報なので、1 回聞いただけでは分からないと思います。また、日本は、他の国と比べてリカレント教育が進んでおりません。他の国では、リカレント教育をしていかないと社会でついていけないと言われていて一方で、日本では企業外での学び直しは企業と結びついておらず、自己完結の学び直しだと言われています。外国では、次の企業に就職するためにはこの学習をしなければならないというテーマが定まっていますが、日本ではそれがなく、人間としてどう成長するかという教育が成り立っているため、生涯学習のあり方自体が問われた時代があったなと思ったところです。新庄東高校には、「世界へ羽ばたこう」という校是がありました。その校是について、「世界の前に、地元への貢献をどう考えていますか。」と質問したことがあります。今ではその校是を言わなくなり、校長先生は「地元へ貢献しよう」と言ってくださっているそうです。今は、駅前を借りて e スポーツのコーナーを作り、サテライト教室としているようでした。新庄東高校だけでなく、こらっせ新庄も子どもたちの活躍の場を作りたいと、印刷機などを置き、環境を充実させているようです。また、新庄の子どもたちは過保護な子が多い、という話を聞いたことがあります。高校でアルバイトを禁止されているなど、自分の力でお金を稼いだ経験がない子が多いようです。そんな中で、フィットネスクラブ スタイルハートを経営する富澤さんを代表に、高校生が集まり活動する WATS という団体があります。代表の富澤さんは、高校生が活動資金を自力で生めるよう助言をしながら活動を行っているようで、補助金がなくても活動を可能にしている団体です。このように、ふるさと学習の目指すところも、新庄の良さに気づく、感性を磨くに留まらず、子どもたちの自立に繋がるようなものになってほしいという思いを持ちました。大館市でも、教育委員会がアルバイトを認めるのであれば、教育委員会でハローワークの役割を担っての体験学習というのは生まれなかったかもしれません。細かいところについては、教育委員会だけでなく、商工観光課などとの連携が必要になるかと思いますが、

中学生にも1時間100円程度を報酬として、職業体験とアルバイトの2面性を持った体験活動をさせてみるのも1つの案かと思います。中学生にとっては、このような体験が自立するという点で成長に繋がるのではないかと考えます。経験に関していうと、学校の部活動にも影響するのではないのでしょうか。部活動の地域移行が進んでいく中で、スポーツを教える指導者不足が問題になっているかと思います。ピアノや書道といった文化的な習い事に関しては月謝を払って教えてもらいますが、部活動となると別だと考えている人もいないのでしょうか。どのスポーツの指導者も、自らが昔取った杵柄をボランティアで教えてくださっていますが、そういうわけにもいかないのではないかと思います。少し話がずれてしまいましたが、ふるさと学習をする中で、教育委員会自体も変革をしてみてもいいのでしょうか。最近では昔から継がれてきた家の畑や田んぼなど、長年守ってきたものを手放してしまう人も多くいるようです。ご先祖様が大切にしてきたものをいらないということがまかり通るような怖い時代になったように思います。先程阿部委員から新庄まつりのお話がありましたが、企業の方々は新庄まつりに熱い思いを持っている社員は能力が高いと認めているようです。新庄まつりに参加する人へは休暇を与えるし、休んでいる分は郡部の社員でカバーし、郡部のお祭りの時には新庄の人たちでカバーをするという形で回っているようです。お祭りのときに夜遅くまで準備をしているような人たちは、仕事も一生懸命やっているところを見ているでしょう。このような点が先程話をしたハイテクハイタッチに繋がるのかなと思います。さて、それでは委員の皆様からもう一度ずつご意見をいただきたいと思います。子どもたちの考え方や学習・発表に対して、どのように活かしていくか、教育次長へは予算をお願いしますと言ったところですが、良い考えやアイデアがあれば共有をお願いします。

(栗田委員) 先ほど、市長から中学生のアルバイトの話がありましたが、私は、中学生のころ、年賀状配達アルバイトをしていました。昔は、アルバイトの際には学校に届け出は必要ありませんでした。やはり、自分でお金を稼ぐという体験は大切だと思います。また、今とは全く別の話になりますが、明倫学園の竣工を祝う会の懇親会の中で、工業団地のある幹部の方と話をしたところ、今年、大卒で5人を採用する計画で応募を出したが、申し込みが2人だけだったそうです。2人とも採用としたのですが、就職することになったのは1人だけだったというお話でした。その話を聞いて、若い人たちが地域の企業についての理解が全然ないのだなと感じました。もっと小さいときから、たくさん企業があって、仕事内容や働いている人達の思いを分かっていたら、地域の企業に応募する人も増えるのではないかと思います。先ほど、教育長の話聞いて、地元企業の種類や仕事内容、働いている人の思いをまとめた冊子のようなものがあって、それを中学生に配布して、さらに、興味のある企業について勉強してみよう、調べてみようというようなふるさと学習もあっていいのではないかと思ったところです。現在は、どの企業もとにかく人手が欲しいと、若い人の奪い合いになっているそうです。そういった時に、少しでも地元企業に入るような人材を作っていくというのも、学校教育の役割ではないかと思ったところです。それから、最初の説明に児童・生徒たちの発表を取り入れて欲しいという先生方の思いがあるということでしたが、この前の新聞で、ふるさと学習の発表会で発表したところ、役場の担当の人から本気になって否定されたという記事を読みました。提案したことをすべて否定されて、悔しかったけれども、大人が考えていることを知ることができて勉強になったという意見がありました。そのため、そういう否定される経験も大事ではないかと思ったところです。やはり、自分たちがやったことを聞いてもらう場があることが採用される、されないにかかわらず作っていく必要があるのかなと考えます。

(市長) ありがとうございます。次に、齊藤委員お願いします。

(齊藤委員) 高校生の息子がいるのですが、エリアラーニングとして、地元に出て単元を稼ぐと、それが内申点に結び付く課題があるようです。高校に入って1ヶ月後ほどで何をしたいかという調査があり、その単元の中に新庄まつりが入っていました。地元の囃子に参加している生徒は、囃子の練習に出るごとに1単元取れるようでした。しかし、今年1年間で36単元を取る必要があり、囃子の練習だけでは単元数が足りず、他の活動により単元の取得をしていました。その活動というのが、新庄のユニクロで、経営理念を聞き業務の一部を体験するものだったそうで、体験から帰ってきて、すごく楽しかったと感想を教えてくださいました。アルバイトのようにお金をもらえるものではありませんでしたが、成績に結びついていくようなスタイルで行っている活動ではあるものの、このような地元での体験が、将来的に地元愛に結びついていく部分なんじゃないかなと、息子を見て感じたところです。もう1つ、学校と地域をつなぐコーディネーターということで、学校運営協議会があり、私も参加させていただいていますが、7月の第1土曜日に、八向中学校の1年生の学校行事で、一緒に八向楯に登ってきました。その中で、ほとんどの保護者の方が初めて登ったと言っていました。昔の歴史の話をしながらか一緒に登ったところですが、あとから保護者の方に感想を聞いたら、「知らなかったことばかりでした」と言っていました。コーディネーターの方はもちろん大切ですが、まずは地元の保護者の皆さんがコーディネーターになって、子どもたちに歴史を繋いでいくことが大切だと感じたところです。学校運営協議会の役割の一部としては、まず保護者の皆さんを巻き込んで、地域の良い部分を伝えていくことがとても大事になってくるかと思います。そのような活動をとおして、子どもたちが大きくなって、一度地元を離れても、地元に戻ってくるくらいの郷土愛に火がつけば嬉しいのかなと感じているところです。

(市長) ありがとうございます。次に、教育長お願いします。

(教育長) 子どもたちの発表や提言について、発表を聞いてもらって、否定をされる経験も必要だというのはそのとおりだと思いますが、ある所で、役所の職員から聞いてもらったが、予算がないのであればできないだろう、というようなことを言われて、子どもたちはがっかりしていたという話も聞いたことがあります。役所の職員が子どもたちに対してどのように言ったのかは分かりませんが、「実現のためにはお金が必要で、そのお金を得るためにはこういう段階を踏む必要があります」というようなアドバイスをしてもらえれば、子どもたちの反応も違ったのではないかと思います。そのため、子どもたちの発表をどう受けとめて、否定的な意見を言う場合にも言い方に十分配慮をするなど、私たち大人も学んでいかなければ、子どもたちの学習もなかなか進んでいかないのではないのでしょうか。昨年度の教育の日で発表をした新庄中学校は、PR動画の音楽を自作しておりました。そのため著作権も新庄中学校に帰属するので、何かの機会にどこかで使ってもらうことができれば、発表をした甲斐があったなと思えるのではないかと思います。今年度発表予定の学校のうち、八向中学校では、今回、電通の社会奉仕体験事業と合わせて、東京学芸大学と協力してプログラムを作って、キャッチコピーの作成をするそうです。子どもたちが作ったものを、どこかの機会を活かしてもらえれば、子どもたちとしては「準備や作成は大変だったけれど、こういった段階を踏むことで効率的に作業を進めることができるのだな」と学びながら体験できるのかなと考えたところです。

また、調べ学習の中で、あるテーマを題材にして学習を進めて、次年度に次の学年の生徒が同じ題材で学習を進める場合、前年度の生徒が調べた資料や、発表に使った資料を引き継いで、次年度の生徒はその続きから学習をしていけば、より深い学びを得ることができるのではないかと思います。以前、環境サミットを行っていた時、新庄小学校は指首野川、北辰小学校はイバラトミヨの発表をしていましたが、学年が変わっても発表内容に進化があまりないように感じました。前年度の資料を見ずに学習をスタートするのと、学習履歴を学校で保管し、活用したうえで学習を進めるのでは発表内容が大きく変わってくるように思います。金山町で行っている「金山学」では、ポートフォリオを活用しているようで、多くの資料の中から必要な情報を探して学習を進めているそうです。新庄市も活用できる資料を保存し、次年度以降に活かせるようにするなど、学習を進めるために検討が必要だと考えております。松田甚次郎という新庄市の鳥越出身の偉人がおりますが、この方の学習は日新小学校だけでなく、新庄小学校でも行っています。甚次郎サミットのようなイベントを開催すれば、他の学校も刺激を受けて、良い方向に向かうのではないかと意見を述べたところです。最後に、新庄開府 400 年となる令和 7 年度に向けて、事業提案に対し予算を与えるような取り組みのようなものを実施する予定があれば、採用に至るかは分かりませんが、小中学生に声をかけて、挑戦する機会を与えてみるのも良い経験に繋がるのではないかと思います。

(市長) ありがとうございました。次に、奥山委員お願いします。

(奥山委員) 今までのお話を伺って、アルバイトをして自分で稼いだ経験がある人、お祭りなどのイベントや行事で苦しい時期を乗り越えてきた人、それから新庄の偉人の方などに共通して、自分の思いを持って自立した人たちなので、そういう方たちのことを学ぶことによって、子どもたちが、自分が自立するイメージを持つことは、これからの学習の中でも大事なのかなと思いました。普段の学習の中でも、子どもたちの自立的な学びというものを大事にしていかなければいけないなと思いました。

(市長) ありがとうございました。次に、阿部委員お願いします。

(阿部委員) ふるさと CM 大賞が毎年開催されているわけですが、山形県内の各市町村に素材がたくさんあるなと思って毎年感心して見えています。ああいったコンペのようなものを、機会があれば子どもたちにも経験させてみたいと思いました。ふるさと学習も、ただの発表ではなく、コンペのような形にして、市長賞や教育長賞を作って開催することも 1 つの手なのではないかと考えました。子どもたちの意欲をかき立てるために、賞を与えて、そこで評価を得て、助言等があることで子どもたちも納得できるのではないかと思います。

(市長) ありがとうございました。最後の意見は、早速実践できるようなものではないかと思います。小学生部門や中学生部門、学区ごとなど、地域のふるさと CM 大賞プロジェクトというような形で選考して、評価を与えるのは良い考えだと思います。選考するためには基準が必要になるので、自分たちの学習の成果を、発表時間や評価の点などの選考の仕様に合わせた発表が上手くできるようになれば、より大きな成果が得られるのではないのでしょうか。そのような形での評価は私たちにも可能であるように思います。今日はふるさと学習の課題として話をしてきたのは、発表や提言に耳

を傾け、アドバイスをしたいという子どもたちの声にどう答えるかということです。ふるさと学習をして発表をしても、結果的に右から左へと流されるだけでは、子どもたちは何のためにやったのか疑問に思ってしまうかと思います。しかし、それを集約した形で同一条件のもと、学校単位のふるさと CM 大賞として実施するのはとても面白い提案だなと思いました。栗田委員が話していた大館市の研修でのお話について、人材不足の中で地域にいかに残すかということが大きなテーマなのかなと考えます。企業の方々は、10 数年前から地域巡回での企業紹介をやっていたり、産業まつりなどのイベントでもものづくり体験のために小さなゲームを作ったりと、可能な限り挑戦してきた部分があるのですが、保護者の皆さんは1つの行事のイベントくらいに考えているのではないかと思います。そしていざ子どもが就職するとなったときには、過去の経験や情報はたくさんあるはずなのに、それらはもう抜けている状況なのではないでしょうか。進学・就職が間近になったときに、自分の能力、自分の実力で入れる大学や企業を選択して、過去に積み上げてきていた経験や情報は活かす機会がなくなってしまっているように思います。大学に進学する人の中で、1・2年生の内に就職したい場所が決まっている人は少なく、多くの人が3・4年生になったあたりから企業を探したりし始めるのかと思いますが、その企業を探し始めるタイミングで情報が入っていくようにするためには相当の工夫が必要になります。新庄市には、企業訪問奨励金というものがあり、事業を始めて10年近くになります。参加してくれた学生は3人程だったかと思いますが。少ない人数ではありますが、2週間というインターンシップの中で、人柄や実力が分かります。また、企業の社員は皆温かく声をかけてくれるため、最終的にその企業に就職する方もいます。新庄の人は、新庄市の企業は給料が安いと思っている方が多いかと思いますが、物価に合わせた金額であるためその点については仕方ないものです。また、家族と暮らすと家賃や光熱水費が多く必要とならない分、お金も貯まります。若い方には地元で暮らす利点についてももっと知ってほしいと思います。ふるさと学習は、子ども達にとっては感覚を研ぎ澄ませてふるさとの良さを知ってもらう機会であり、行政や企業側としては人材確保のためにどのように学習に結び付けて地域の発展に繋げるものになってほしいと思います。高校からの就職・進学についても、「優秀な生徒を都市圏の大企業に就職させた」、「難関大学に何人も合格した」などというようなものを実績とするのではなく、「高校を卒業して何人も生徒が地元企業に就職した」、「新庄市の高校から難関大学に入学し、卒業した生徒が地元就職のため戻ってきた」というような地元への貢献を実績として聞き、活かしていくことが次に繋がる指標となるのではないかと思います。公立高校の校長先生は短い期間で異動することもあるため、変革を起こすこと自体が難しいかと思いますが、ふるさと学習の最たるものは地域の経済を支えていく人材の育成なので、小中高と一貫していくべきであります。教育委員会として、ふるさと学習について日々学びながら、児童生徒の学習を支えていただきたいと思います。まとめとなっていないかとは思いますが、以上で協議を終わらせていただきたいと思います。

#### 4. その他

なし

#### 5. 開会

午後4時35分閉会する。